質疑応答と全体討議

「海外の大学が日本の日本語教育機関に期待すること」

【質疑応答】

○**丸山**　池田先生、ありがとうございました。

それでは、ここで質疑応答の時間をとらせていただきます。先生方、どうぞ、壇上にお上がりください。

きのうはとても寒くて、東京で初雪が降ると言われていましたし、風も強く、嵐が来たなというような、むくむくむくっとした雲が来たのが大学の建物から見えたんですけれども、私はこの小澤先生はじめ海外の日暮先生、大島先生、徐先生、レベッカ先生が嵐を呼ぶ女だったのではないかと思っています。先生がたは立教大学がこんなシンポジウムを企画したいという声に応えて駆けつけてくださり、熱意と、情報とがきゅっと詰まった形で熱く語っていただきました。本当にありがとうございました。

今、4 時 15 分なのですけれども、これからまず 15 分はそれぞれのパネリストの方への個別の質問を受けつけて、質疑応答という形で進めてまいりたいと思います。そして、4 時半から、全体討議に入って、また全体についてフロアの皆様とも一緒に考えるというような形で時間を過ごしてまいりたいと思いますので、

よろしくお願いいたします。

　それでは、まず個別の質問から、ぜひお願いしたいと思います。マイクで走ってくださる方、大丈夫ですね。手を挙げていただけましたら、係の者が駆けつけますので、ご所属、お名前をお願いいたします。そして、どのパネリストの先生へのご質問かを言っていただいて、お話しいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○**質問**　先生方、どうもありがとうございました。中央大学の若林と申します。ICU の小澤先生、評価の話、とても面白かったです。実際に実施するにあたって、もし先生のところでやっていらっしゃる評価の結果が公表されていたら、参考にしたいので、例えば、ウェブページとかで公表されていますか。本になっているとか。そういうのがあったら教えてください。

○**小澤**　ありがとうございました。実は、本学ではまだ、今言ったような枠組みでの評価というのはしていなくて、いわゆる大学評価ですとか、海外のほうのアクレディテーションを取るための評価はしていて、そちらのほうは ICU のホームページのほうに PDF でダウンロードできるようにはなっています。

○**質問**　今、お話のあったような評価が、ICU ではなくても、どこかを見ればそういうものをやっているというのが分かるようなところがあれば、教えていただければと思います。

○**小澤**　日本国内では、こういう形でいわゆる大学とか教育でやっているものはあまりないのではないかと思うんですね。今、学校評価というものが文科省のほうで、各小中高で、小学校・中学校中心ですけれども、やろうということでやっていて、立案した人たちは評価学の専門家なのでこういう枠組みでと思っていたはずですが、実際に今各学校で取り組まれているものは少し異なった形になっているというのが私の印象です。海外ですと結構いろいろなところがやっているのですが、今パッと名前を出したり、URL を出したりはできないのですけれども、もしよろしければ、後でメールででも。あとは、実はこちらの立教の日本語教育センターにご協力いただきまして、一緒にここの第三者評価とか、自己評価とか

をこの枠組みでやりたいということで科研費をいただきまして、ことし動き始めたところです。ですから、2年、3年の間には公開できるようなものがきっと出るのだと思うのですけれども。

○**丸山**　ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。石田先生、お願いいたします。

○**質問**　筑波大学の石田です。今たまたま出ましたので、プログラム評価となるとちょっと大きくなるので、フランスが学習者による授業評価というのはすごく進んでいるんですね。私もすごく意外だったんですけれども、きょう出ましたよね。だから、あれと同じようなことをもっと幅広くいろいろなところで協定校を持っている大学で、まずそこから始めたらよろしいのではないかと私は思います。そうすると、ここのきょうのセミナーの1つの成果になって、多分一番具体的に分かる可能性のある方法ではないかと思います。それで、日本でも一番学習者による授業評価というのは、大学評価の中でも最も進んだ領域なんです。これは国際教養大学の田丸淑子さんが科研費を取ってその報告書を書いています。ですから、それが参考になると思いますので、ぜひ私としてはきょうの成果として、学習者による評価というのは、一番やりやすいのでやっていただけたらと思っています。

○**丸山**　ありがとうございました。ではまず、池田先生、お願いします。

○**池田**　ありがとうございました。学習者による評価は、立教大学に留学してきている学生に対しては毎学期実施していますが、やはりどうしても時間的なこと等があって、大島先生が教えてくださったようなところまでは細かく踏み込んで、学生が本当にどういうふうに思っているのかというのは、調べられていない現状がありますので、今後、全員という形ではなくても、サンプリングして深く聞いていくことをフィードバックしていくとか、あるいは、協定校の先生方にもう少し信頼関係を築いて、帰った学生が本当はどう言っているのかという情報を集めていきたいと思います。ありがとうございました。

○**丸山**　私も本当にきょうの大島先生のご発題は、学生の評価なんですけれども、

それをフランスの背景ですね。それをもって説明していただけたという点がとてもありがたかったと思います。学生がよかったとか、悪かったとか、そこのところで終わらないで、なぜそこでそういう意見が出てきているのか。そこから私たちがどういう示唆を与えられるのかというところまで教えていただいたと思います。すごく勉強になりましたし、こういった形での連携というのも、ぜひ進めていきたいと思いました。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。池田先生、お願いします。

○**質問**　目白大学の池田と申します。きょうはとても貴重ないろいろな情報を本当にありがとうございました。いろいろと刺激になりました。パリ大学の大島先生にご質問いたします。今の評価のことと非常に関係しているのですけれども、私もフランスの事情が非常によく分かりまして、それで、立教大学に留学してきた学生さんたちがそういったコメントを持っているということも、初めてその実態を知りまして、えっと思ったんで透けれども、こちらの受け入れ側もやはりそれに合わせてデザインをしていくことがとても重要だと思います。逆になのですが、送り出し側として、学習者にというか、留学生として送る人たちにどういったことを事前指導のようなことをしているのか。何かありましたら、ぜひ教えていただきたいと思います。

○**大島**　そうですね、実際にはあまりしていないですね。まず選考が、だいたい優秀な学生を、成績の基準と、動機書といって、自分が日本で何をしたいかとか、どこの大学を選択して、それは何のためで、何をするためにその大学を選択して、日本で何をしたいかというようなレポートみたいなものを書かせるのですけれども、それがわりときちんと考えてあって、よくできている、日本に行って、ただ遊ぶ、ただ日本に行きたいとか、そういうのではなくて、きちんと考えて何をしたいかということまで考えて、日本に行きたいんだということがよく分かるような学生を選ぶわけなので、もう既に人物的にわりとしっかりしていて、成績もいいというような学生を選んでいるので、その人たちをまたそこで集めて、何か特

別に教育するというようなことはあまりありません。ただ、ちょっと何かトラブルがあるときには助けたりはしますけれども、事前教育はあまりやっていないです。

○**質問**　分かりました。ありがとうございます。

○**丸山**　今ので、事前教育についてもしほかのパネリストの先生でも、何か情報がありましたら、お願いできますでしょうか。日暮先生、お願いします。

○**日暮**　うちで送り出すときには、たとえ今 2 年目が終わった学生、3 年目が終わった学生でも、受け入れ校のプレースメントテストを受けて、その受け入れ校のカリキュラムで一番いいところに入れていただくので、自分で勝手に、2 年目が終わったから 3 年目に入れてもらえずはずだとか、3 年目が終わったから、受け入れ校の 4 年目に入らなくてはおかしいとか、そういうふうには思わないほうがいいというふうには言っています。そして、日本のカリキュラムは特に、中国、韓国からの優秀な学生さんが多いので、アメリカの普通の、英語圏の学生用のカリキュラムと比べて非常に内容が濃くてレベルが高いので、レベルが下がると思ったほうが間違いがないという言い方はしています。そして、学生が特に不満だというときには、私にメールが来ます。それで、日本語科の先生とちゃんと話をしたのかと聞きます。先生がどういうアドバイスをしているかについても尋ねます。本人に不満があるようだったら、本人にメールで言わせるんですけれども、だいたい書いて不満を述べると安心するようなところもあるようです。いったん気が落ち着いて、そのレベルで始めて、結果として非常によく、カリキュラムに合った学習方法を覚えて、そして次の学期は 1 クラススキップできたとか、かなりレベルが高くなって帰ってまいります。ですから、受け入れ校の先生方を全面的に信頼して、選んでくださったレベルが最適であるという認識を持つように、というアドバイスはいつもしております。

○**丸山**　ほかにいかがでしょうか。

○**質問**　本日はありがとうございました。立教大学異文化コミュニケーション学部のアサミです。サンディエゴ州立大学の日暮先生にすごく素朴な疑問なのですけれども、エクチェンジプログラム、提携校をたくさん結んでいるのを、挙げてあるのを見て、大阪の大学であるとか、地域で方言などがあるところがあると思うんですね。そのあたり、学生さんたちが行って驚かれるとか、抵抗を示してしまうようなことはありますでしょうか。

○日暮　大阪は今、大阪芸術大学、それから大阪国際大学でやっていますけれども、学生が大阪へ行きたいということを希望します。ですから、行って方言が強くて驚くのではなくて、方言が好きだ、もしくは大阪弁を勉強したいと思っている学生が行きます。応募するときに、第一志望、第二志望、第三志望と書かせます。理由も書かせますので、本人たちはかなり調べてからどこに行きたいか決めます。あと、今度、立命館に行くことになっている学生ですけれども、言語学専攻で特に方言学に興味があって、京都弁をぜひ覚えたいということで、行くことになっています。

○質問　ありがとうございます。

○大島　うちの大学も結構、関西とかに交流校を持っているんですけれども、それで私は 3 年生のときに、私の「日本語学概論」という授業の中で関西弁をやります。たいした時間ではないのですけれども、3 時間ぐらい使って、一応、文法的にどういうふうな違いがあるかとか、アクセントの違いも一応やってみたりして、テープも聞かせたりして、聞き取りができる、つまり、理解はできる、全然分からないものではないんだよというところを一応見せて安心させるんですけど。そうすると、学生は結構それが面白いというので、関西方面を選ぶ学生もいるんですね。

○質問　ありがとうございます。

○丸山　では、スーター先生、お願いします。

○スーター　シドニー大学でも、前に言ったように、10 のレベルがあるけれども、アドバンスの Japanese9 というクラスで 1 週間、関西弁をやって、もう 1 週間は東北弁。ちょっと味見だけですけれども、でも、だから日本語は標準語だけじゃないという概念を通したいから、そうですね。

○質問　すごく面白かったです。ありがとうございます。

○丸山　ほかにいかがでしょうか。木田先生。

○質問　国際交流基金日本語国際センター専任講師の木田です。きょうは本当に

大変有意義な情報をたくさんありがとうございました。国際交流基金日本語国際センターでは、ノンネイティブの教師研修を行っておりまして、約年間 500 人の先生方、ちょっと今までの累積を数えますと 1 万人に達しているようなのですけれども、そのぐらいの教師研修の仕事を通しまして、私も日々の研修カリキュラムを組む際にいろいろ考えていること。それから、帰国の前に評価をしていただいているのですが、研修に対する評価プログラム、評価をいろいろいただいている先生方の声の本当にその背景をきょうは詳しく教えていただいたと思っております。本当にありがとうございました。

それで、先ほど日暮先生が国際交流基金のほうにもコンタクトを取ってくださったということなんですが、ちょっと恥ずかしながら、私はその情報を得ていなくて、独立行政法人として、国際交流基金も非常に大きな組織ですので、いろいろな部門がありますので、ちょっと本当に教えていただきたいなと思ったことは、どちらにどのようなコンタクトをとったのか。また、こちらのほうでもいろいろ、大学との連携ですとか、いろいろなことをこれから、もうそれこそ本当、チーフスタンダードとか、いろいろなことをやっていますが、どのように展開していったらいいかということを、国際交流基金本部および日本語国際センター全体で今、考えているところなんです。どのように進めていったらいいかということも含めて、どのようなコンタクトをとられて、どのような反応だったのかということをちょっと教えていただければと思います。

○**日暮**　分かりました。私が申し上げたのは、先月参ったウエスト・ジョージア大学の場合は、国際交流基金さん、別に国際交流基金さんとは限りませんけれども、日本の政府関係機関には管轄領域というものがありまして、何州だったらどこのオフィスに連絡を入れろ、というのがあります。ウエスト・ジョージアというのはアトランタに近い大学です。 国際交流基金でアトランタを担当しているのは、ニューヨーク事務所です。ニューヨークフォフィスでは、山本訓子さんがコーディネーターをしておいでですので、山本さんに入れて、どのようなグラン

トに応募が可能なのか、どういう方に連絡を入れたらよいか等、教えていただきます。すなわち、ウエスト・ジョージア大学で今こういうことを考えていて、日本に学生を連れて行きたいと思っているのだが、どのような助成金があるかを教えていただくのです。通称スモールグラントと呼ばれているグラントに応募できることが分かりました。そして、ウエスト・ジョージア大学にお名前を出すこと、および直接連絡を入れさせても構わないことを確認し、電話の直通番号やメールアドレスを教えていただきました。

ですから、日本の国際交流基金のオフィスにではなくて、アメリカの照会のあった大学の所在地を管轄区域にしている事務所の担当の方に連絡を入れます。

もちろん、ニューヨークの山本さんに連絡を入れる前は、ロスの国際交流基金の伊藤実佐子所長さん、鈴木玲副所長さんに、このような場合ニューヨークのどなたに連絡を入れたら宜しいでしょうか、とご相談します。

つまり、日本政府機関というのは、別にアメリカの政府機関もそうなのでしょうけれども、ただ普通に連絡を入れただけでは話しが通じなくて、必ず紹介者が要るのですね。ということは、逆を言うと、アメリカにいる場合には地元を管轄区域にしている事務所はどこになるのか知っておく必要があります。サンディエゴの場合は、ロスに全てが揃っています。ロスの領事館、ロスの国際交流基金、ロスのジェトロ、ロスの日本政府観光局です。この四大機関の担当者を把握し、何かあったらすぐに相談に乗っていただける態勢を作っておくことが非常に重要になります。

このようなネットワークのお蔭か、アメリカ州立大学連合の『全米日本研究セミナー』をやる際には、領事館からは新美総領事、国際交流基金からは伊藤所長、ジェトロからは吉村所長、政府観光局からは藤内所長、というようにトップの方が担当領事、副所長、次長の方々を伴ってご参加くださっています。発表も毎年してくださいます。学長主催のレセプションにもご出席くださり、このようなセミナーを開催していることに対し日本政府を代表し謝意を述べてくださいます。大学トップの人間に日本研究や日本語教育の大切さを改めて認識させる又とない機会になります。このような日本政府機関のありがたさは、海外に出た人間でなくては分からないものかも知れません。

○**質問**　ありがとうございました。これからもまたよろしくお願いいたします。

○**日暮**　いいえ、こちらこそよろしくお願いいたします。

○**丸山**　この場でつながってとてもよかったです。レンさん、手が挙がっていましたよね。

○**質問**　立教大学異文化コミュニケーション学部、3 年のレンと申します。よろしくお願いします。本日はどうもありがとうございました。学部学生なので学生らしい質問をしたいと思います。日暮先生に質問なんですけれども、年賀状のコンテスト、すごく面白かったんですけれども、例えば、だるまがあったり、神社の鳥居の絵が描かれたり、具体的に小学生も参加していらっしゃるんですよね。

○**日暮**　学会会員の先生方がご自分のクラスで、日本のお正月の習慣とかを説明なさるときに、ついでにみんな絵が好きですから、じゃあ年賀状を書いてみよう、宿題にしよう、みたいな形でなさって応募させるんだと思います。

○**質問**　では、具体的に日本文化とか日本文学の授業、そういう教育を受けていなくて、普通に日本はこういう国だよという紹介をして、こういう作品ができあがったのですか。

○**日暮**　授業の一環としてやっているはずですので、どこまで導入するかはその先生の御判断だと思います。

○**質問**　分かりました。ありがとうございます。

【全体討議】

○**丸山**　ありがとうございました。それでは、ちょっとまた時間が来ていますので、全体討議に入りたいと思います。スライド、映りますか。全体討議は、本日のシンポジウムのテーマであります「海外の大学が日本の日本語教育機関に期待すること」なんですけれども、2 つのテーマを考えてまいりました。1 つは、すみません、立教日本語教育センターの企画なので、立教大学だからできることということをちょっと考えてみたいと思います。なぜそのようなことにしたかと言いますと、新しい、それから小さいプログラム。そういう位置づけで自分たちの組織を考えているからです。短期交換留学プログラムで考えてみますと、学生の交換というのは、まず私立大学のほうで伝統があるのですけれども、ある程度の規模で展開されていたのが、留学生 10 万人計画を受けて、1995 年から国立大学を中心に大規模に展開していく。そういった大きい潮流を受けて、立教大学もまたたくさんの留学生を迎えると。そういった形になってきています。

本当に大規模に展開されているのが、まさに 1995 年の国立大学からバーッと始まる、そこが一番の台風の目のような形になっているところもありますので、そういった中で、私立で私たちのように、今やっと 3 年目を迎えるような組織、2011 年 4 月に立ち上がって、そして規模が小さい。でも、だからこそできることというのがあるのではないかというようなことを考えておりまして、そこを見いだしていきたいと思いから、先生方にご討議いただけないかなと思っております。まず、パネリストの先生方から少しご発言をお願いしたいと思います。その後、それを受けてまたフロアの皆様にお話をいただければと思います。また同時に、次なのですけれども、きょうの池田先生の話の中で。日本語教育というのが外側にある位置づけなんだけれども、だけれども、日本語教育が真ん中にあってできることだってあるのではないかというお話をしてくださいました。私もそこのところに可能性を見いだしていきたいと思うんですね。決して外のところを否定しているのではなくて、両方。外のところとしての機能もしっかりやっていきたいし、それから、日本語教育のところ、それから日本語というのを中心にして、何か役に立つようなことができないかということも考えてみたいと考えていて、そこについてもちょっと皆様と話し合ってみたいと考えております。

1 点目、まず、立教大大学、新しい、小さい組織だからできること。これについて、まず先生方からお願いいたします。

○**スーター**　シドニー大学の面から見れば、前に言ったように、Bachelor of Arts Languages というエリートというか、限られた人数のディグリーにぴったりだと思います。だから、ダブルディグリーを本当にとても楽しみにしています。

もう 1 つ、言っていいか分からないけれども、ロケーションもちょうど、学生にすごく魅力があると思います。多分それはどこでもそうだと思いますけれども、日本教育に興味を持ったのは、サブカルがきっかけですから、池袋がそのセンターですから、それも多分、それも 1 つの理由だと思います。

○**丸山**　ありがとうございます。ロケーションは大切にしたいと思っております。ほかにかがでしょうか。

○**徐**　まず、共同研究、もう一度、強調したいことは、Can − do に基づいた教材開発、中国で、むしろアジアで第 1 号、出版されたばかりです。日本語教育の先端に立っている華東師範大学と組んで研究、開発することは、もちろん立教大学留学生センターにとってもプラスになります。そして、中国での日本語教

育の発展にもつながるので、非常に意義のある研究だと思います。この共同研究の成果をぜひ中国の全土に広げていきたいです。もう 1 つは、量より質。立教大学は名門校ですから、これから留学生を受け入れるとき、そうしていただきたいです。私たちは毎年のいろいろな協定校に学生を送っていますが、、1 年間で戻ってきて、大学によって全然違うんです。学芸大学とか、経験のある大学から戻ってきた学生の、日本語表現はもちろんのこと、自分の考え方を持っています。私は 4 年生の授業を担当していますので、4 年生の授業の発表、プレゼンテーションも違ってきます。その違いが立教大学がぜひ 1 つの経験として学んでいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○**大島**　学生がどこの大学に留学するか決めたいときによく相談に来るんですね。それで、そのときに、こちらからできるアドバイスは、この大学はどういう分野が強いというような説明で、それを聞いて日本研究の学生は自分がやりたいテーマに近い分野が強い大学を選ぶわけです。ですから、立教大学の中でも、私ははっきり言ってあまりよく分からないのですが、かなり強い分野がやはりあると思うので、社会科学とかですか、強い分野があれば、そこの部分とこの日本語教育センターを結びつけていただくと、うちの学生などには、その分野だと立教大学に行けと推すことができ、それにその分野に関係した日本語教育もあるよと薦めることができます。それで、そういうふうにやっていただけたらと 1 つ思いました。

　それから、小回りが効くと丸山先生もおっしゃっていたので、学生の個別対応ですね。プレースメントテストによって入れられたクラスのレベルが難し過ぎるとか、やさし過ぎるとか、その場合どうしたらよいかとか、そのレベルのクラスで自分は余裕があるとかないとか、というような学生の日本語の授業の相談にのっていただけるような係りの人がいて、そこに相談に行けば、随時、個別に対応してもらえるというようなシステムがあればいいなと思います。

○**丸山**　ありがとうございます。小回りが効くというのは、見ていただくと分かりますかもしれません。池田先生と私がいるのですけれども、きょう着てきた服、ショッキングピンクとこの服、こんな感じで全然、性格もいろいろ違うのですけれども、でも何かでこぼことやっているところに、教育講師の先生方が加わって一緒にやっているといったところがありまして。そういう意味で小回りが利くなと思っております。

○**日暮**　大島先生がおっしゃってくださったこととも関連しているのですけれども、うちと異文化コミュニケーション学部との提携はコミュニケーション学部だけです。でも、日本に来たいという学生の中には、立教はビジネス、すごいじゃないか、ビジネス関係のクラスも取りたいという学生もいます。もちろんコアになるのは日本語教育で、きちんと日本語能力が伸びるようにしていただいているのですけれども、それプラス、学生たちが取りたいというビジネス関係のクラスを何らかの形で取れるようにしていただけると、ますます立教さんを希望する学生が増えると思います。

それから、学生たちはホームステイを非常に希望しますが、それが無理としても、フレンドシップ・ファミリーというような、月に 1 回ぐらい、週末、泊めていただけなくても、土曜日 1 日、もしくは日曜日 1 日どこかに連れて行っていただけるか、うちに招んでいただけるか、何らかの形で日本人の生活が分かるような形のプログラムをつくっていただけると、非常に助かります。それから、春休みの期間が非常に長いので、そういう時期を利用してインターンシップの、難しい長い時間のインターンシップではなくて、それこそ 1 週間、もうご迷惑になると思うので、1 週間ぐらいだったら受け入れてもいいよというようなところがもしありましたら、そういうところを 2、3 カ所紹介していただけると、学生たちは非常に喜ぶと思います。そのくらいです。

○**小澤**　親の七光りをあてにするな、親のすねはかじるなという教育をよく受けるんですけれども、かじれるすねがあるならかじれとか、もらえる七光りがあれば使えということを、池田先生もご存じの先生がよくおっしゃっていました。それと同じことをちょっとこの間思いまして、鳥取、島根の大学で国際交流、留学生受け入れは非常にコストがかかる。それから、外国人教員を定着させるにも非常にコストがかかる。生活をしようと思ったときに、子どもが生まれたら、やはり都会のほうがいい、インターナショナルスクールなどはやはり都会のほうがいいというようなことで、引き留めにかなりコストがかかるという話を聞いてきました。そうすると、立教のようなところは、そこでのデメリットはないわけですから、笑いながらロケーションを生かすとかいうレベルではなくて、もっともっと積極的に、都会にあって、立教文化で、愛校心の厚い卒業生がたくさんいて、それもビジネス界にもたくさんの人がいてというようなことをいろいろなことで、とにかくたくさん積極的に打って出るというのにこぢんまりとしていて、連携が

しやすく、営業に打って出れば響いて返ってくる、みたいな環境はぜひぜひ有効に生かしたらいいのではないかと思いました。

○**池田**　本当に貴重な意見がいただけたなと思っています。特に立教の強い部分と組んで何か打ち出せというのは、非常にピンとアンテナが立つ部分がございましたので、早速動きたいと思っています。小回りが効くというのも、多少、例えば、ほかの大学にこういうことをやってくれないかと言ったときに、「それはちょっと難しいのではないか」と言われるようなことも「何とかしましょう」というような姿勢で動けるセンターでありたいと思っていますので、ぜひこれからも先生方始めとして、協定校の先生方からご意見を伺いながら、可能性を探っていきたいと思っています。

○**丸山**　ありがとうございます。では、2 つ目、時間も押していますので、参りたいと思います。日本語教育が中核になってできることですね。時間も押していますので、ちょっとひと言ずついただければなと思いますし、ぜひこれはフロアにいらっしゃる皆様からもご発言いただけたらなと思いますので、ここは一緒に進めたいと思います。どなたからか。

○**小澤**　最初に思っていたのは、中核という言葉は何だろうとちょっと思ったんです。何か大学の中核というと、やはり教育とか研究と思いがちで、でも、そうじゃない部分ですごく生かせるものがあるのではないかということを、きょう思いました。例えば、提携校支援という話が出ましたけれども、そういうものも非常にいいのではないかと思うんですね。日本語教育センターの先生方は多文化・多言語の人たちにどう教えるかというノウハウも持っているので、そういう意味で、学部の先生方が留学生に対して英語で教えるときにも、去年たしか池田先生がお話しされていたと思うんですが、単に同じコンテンツを英語にするのでは伝わらない、いい教育にならない、そこでこういうことができますよというアドバイスができるとか。ただ、そこでちょっと思ったのは、そういうことをすることがセンターの本来の業務なのかという指摘を受ける可能性もあるかなと思ったので、そこは先ほどの評価で、こういうことをすることで立教の大学全体が持って

いるこの部分に確実に貢献をしていますよということが見える形にしていくと、なかなか面白い試みではないかなと思いました。

○**丸山**　ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○**質問**　中央大学の若林です。立教のほうがうちよりずっと場所がいいので、悔しいなと思いつつ聞いていますけれども、うちの中央大学の場合には、日本語教育ではなくて、英語教育ですけれども、例えば、法律の分野が強いので、例えば、契約という言葉は、英語では Contract ですけれども、日本語には「信託契約」という言葉がありますけれども、英語には Contract と Trust というのは矛盾するので、信託契約というのはないんですね。信託という言葉ができる背景を考えていくと、契約で補えないところをつくっていったというようなところがあるので、言葉というのは常に文化とか歴史を担っているところがある。先ほどのビジネスの話もありましたけれども、うちもビジネスは結構いいので、またよろしくお願いします。ビジネスに関しても、立教の強い部分と結びつけて教材を本当に開発していくことで、中核を担うというより、あらためて日本で日本人に対して教えている内容は何なのかというのを確認していくということにつながっていくのではないかなと思います。特に、例えば、観光とか、立教大学が持っていてほかは持っていないようなところに関しては、社会的な責任がある部分があるのではないかなと思います。以上です。

○**丸山**　ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○**小澤**　同じようなことを今ちょっと思い出しました。ICU でも、実は経営はまだいいんですが、経済は特に英語で開講しにくいという声があるんですね。特に国際法とか国際会計とか、国際何とかはいいんだけれども、日本について学ぼ

うと思ったときに、単に単語を入れ替えればいいということではないし、単語がない。単語を教えるときには、やはり背景が分からないといけないので、そこまでケアができないから、だったらやっぱり日本語で開講して、ある程度知識がある人が入るほうが効率がいいと言っては変なのですけれども、与えられた単位で十分授業ができる。そういうことで、なかなか留学生が日本について学びたくて来ているのに、国際的なことしか学べないというジレンマはちょっとあるんですね。そこのところで少しセンターが役立てるのではないかと思います。

○**丸山**　そうですね。連携しながらですけれども、展開していく可能性があるかなと。

○**質問**　地の利の悪い関西学院大学の阿部です。関西学院大学は兵庫県にありますので、まさに海外からの協定校からすると東京でもなく、伝統、文化のある京都でもなくという場所なので、またさらにきょう日暮先生のお話の中で、東京オリンピックがあって、より東京志向がというお話でしたので、今後ちょっと関学のほうでも、関東だと「関学」というと関東学院大学かもしれませんけれども、関西の関学でも営業をかけて、知名度を広めるように頑張っていきたいなと思いました。

先ほどからいろいろ連携というお話がありますけれども、少し思いましたのは、海外との連携、それから外部というお話がありますけれども、少し思いましたのは、海外との連携、それから外部とのということももちろんなのですけれども、例えば、関学の場合ですとホストファミリーの制度というのをかなりとっていますので、そういうときにホストファミリー担当のスタッフというようなところとの、本当の内部での連携をより強める。それで、これまではそういうことをちょっとしていなかったのですけれども、例えば、ホストファミリーが受け入れた留学生となかなか日本語でコミュニケーションがうまくいかないというようなことで戸惑いを覚えていたり、そこでうまくいかなくなって、結局、ホストファミリーを出なければならなくなったということもありましたので、そういうところに日本語の

教員が何かサポートできるということで、それは本当に外部ではなく、本当に小さい内部かもしれませんけれども、そういうようなことができるのではないかなとは感じました。

○**丸山**　ありがとうございました。そのとおりだと思います。ほかにいかがでしょうか。

○**質問**　法政大学の国際交流センターの山本と申します。きょうはいいお話をいろいろありがとうございました。2 点伺いたいことがありまして、1 つは、立教大学のほうのプログラムで、地の利が非常にいいところにあっていいなと思うのですが、その場合に寮ですとか、あるいは学生の宿泊の問題がどうしても起きてくると思うのですけれども、滞在中の寮の問題ですとか、あるいは先ほど大島先生のお話で出てきたチューターの問題。それから、何か問題が起きたときのカウンセリングの問題などはどのように扱っていらっしゃるのかということが 1 つ。それからもう 1 つは、今回の、きょうのシンポジウムの題名が「日本の日本語教育機関に期待されること」で、大島先生のお話ではかなり具体的に伺うことができたのですけれども、できましたらほかの大学の先生方、今までいろいろ送り出してきた学生の後の評判や何かから、これが非常にいいとか、悪いとか、こういうことを期待しているというようなことを、簡単にお聞かせいただけたらありがたいと思います。

○**丸山**　1 つ目からいきたいと思いますが、宿舎の話ですが、寮が。

○**池田**　宿舎でありますとか、例えば、チューターをどういうふうにつけるかとかいうところは、日本語教育センターではなくて、国際センターというところが担っております。日本語教育センターでは、日本語教育研究を業務にしておりますので、寮とか、いわゆる大学間の受け入れのチューターについては、受け入れ学部というところで行っているということになります。

○**丸山**　そのとおりですが、先ほど関西学院大学の阿部先生が言ってくださったように、今はもう国際センターと日本語教育センターはすごく強い連携の中でいろいろ私たちはサポートをいただいているのですけれども、きょう教えていただいたような情報は、ぜひまた国際センターと共有して、そして一緒に何かいい方

法をまた考えていくというふうにつなげてまいりたいと思います。ありがとうございます。

2点目ですけれども、海外の教育機関が日本の大学、日本語教育機関に期待することということで、日暮先生、徐先生、そしてスーター先生からひと言ずつお願いします。

○**日暮**　カリフォルニア州立大学では4年間で学生を卒業させようとしています。120単位ですので、今まで120単位以上要求していたカリキュラムは今すべて手直しをしている最中です。4年間で120ということは、1年間で30、1学期間で15単位、最低取らなくていけません。法的な面で申しますと12単位なんですけれども、15単位取らせてあげて4年で卒業させてあげたいと。海外留学しても4年で卒業できるということをやりたいとしています。15単位取るためには、日本語のプログラムが半分以上主になりますが、そのほかに選択科目として選べないといけませんから、留学生用に取れるクラスが、カリキュラムが結構大きくて、最低20単位分ぐらい、できたら25単位分ぐらいのクラスが出ているのが望ましいと思います。ただ、法政大学さんとはうち、協定を結んでいますけれども、帰ってきた学生の話によりますと、日本語は、4レベルあるけれども、2番目と3番目の間でどっちについていいか分からなくて困ったそうです、学生によってはやさしいほうにいってしまう。そして、難しいほうにいった学生は大変というのがありました。そういうことを申し上げましたら、ちゃんと大学のほうで対応してくださって、新たにもう1レベルつくっていただいて5レベルあるということです。法政さんはうちの大学で今回一番人気で、9名ぜひ行きたいという学生がいて、3名に絞るのが非常に大変でした。

○**丸山**　ありがとうございます。教材、それから教師研修の連携という期待以外にということですね。それから、スーター先生については、学位ということへの期待以外に何かということですね。それでは、ちょっとご発題と違うところで触れていただければと思います。

○**徐**　言語政策に言及したいと思います。今、中国では中国語教育に非常に力を入れて、華東師範大学では教育部に依頼されて、センターになっております。考えてみますと、やはり留学生を大切にするという視点で、市内のキャンパスはほとんど留学生で埋まっています。我々は新しいキャンパスに移動しましたが。華東師範大学では、またニューヨークと連携をして、中国で初めての上海ニューヨ

ーク大学をつくりました。私が言いたいのは、立教大学はどうして人気があるのか、自分の実感ですけれども、すんなりと、例えば、教材研修会議の先生方は非常に国際的な感覚を持ってすぐに仕事に取り込んだというところに非常にびっくりしました。ですから、このような国際的な大学、そういう感覚を持っている大学は留学生を受け入れるときも、多分ほかの大学と違った点を私は強調したいし、期待しておりますし、ほかの大学もぜひ本当の意味での国際的な視野を広げて温かく留学生を迎えていただきたいと思います。

○**スーター**　日本語、日本文化を専攻している学生が、やはり交換するときは全然問題はないのですけれども、問題になっているのは、時々ほかの、例えば、Bachelor of Arts と一緒にほかのディグリーを同時にやっている学生で、例えば、法学の commerce などをやっている学生が、そのメーンは、帰ったら法学の先生たちはそんなにフレキシブルじゃないから、時々単位がもらえないのは、それが問題になるんですね。日本の大学の問題ではなくて、帰ったら、うちの大学の問題で、しかも私の学部の問題ではなくて。ほかの学部の問題ですから、ちょっとしようがないですよね。

○**丸山**　ありがとうございました。5 時を過ぎましたので、そろそろまとめたいと思います。本日のシンポジウム、趣旨説明のところで 3 つのポイントを出したと思います。1 つは、学習者を中核として自分たちは何ができるのかというところでしたが、1 つは、大島先生から、学習者をよく見るということを教えていただいたと思います。それは中を丁寧にしていくというところで、またこれからさらによくしていくための示唆を得ることができたと思います。ありがとうございました。

　そして、徐先生、スーター先生からは、より、今度は外との連携によって、学習者を見ながら、でも、外と一緒に関係を強めていくことで、より学習者にとっても、私たちにとっても、それから海外の大学にとっても未来が開かれていくような可能性をお示しいただいたと思います。

　それから、次は日本語教育という分野を超えたところで何ができるのかというところで、日暮先生からは、日本を知らない先生方に、教養教育の中に日本研究の視点を入れるという取り組みをご紹介いただきました。私たちはそういった取り組み、それから他学部の先生方との連携ということも今日話題に出ていたと思うんですけれども、そうふうに日本語教育の中だけで完結するのではなくて、外

に目を向けていって働きかける。それから、知日派ですね。日本を知るという方を増やしていくということに対する示唆をいただいたと思います。どうもありがとうございました。

こういった試みを私たちの小さな、それで新しい組織がこれから幾つかやっていきたいという中で、きょうプログラム評価という視点をいただきまして、自分たちがどういうゴールを目指すのか。それに向けてどういうふうな取り組みをどんなふうに位置づけてしていくのかということを考えながらこれからやっていきたいなと思います。小さな組織ですので、できること、それからマンパワーの問題もありますけれども、でも、やる、やっていきたいという気持ちでまいりたいと思います。できることを建設的に、それから、めげないで前を向いてやっていきたいと思います。フロアの皆様のいろいろなご意見もありがとうございました。そろそろ終わりに向けて司会にバトンを渡したいと思います。